

平成16年度 大学院入学宣誓式
学長告辞

本日、京都工芸繊維大学大学院に入学されました博士前期課程440名、博士後期課程36名の皆さんに対し、京都工芸繊維大学を代表して心から歓迎の意を表します。今日、研究者を志向する若い新しい力を迎え入れることができたことは、京都工芸繊維大学にとって、大きな喜びであります。

皆さんは、これから学部や修士課程で身につけた知識や能力をもとに、より高度な研究に取り組まれることになります。そこで、大学院での研究ということについて、私の考えを述べさせていただきます。

大学という組織のもつ特徴は、学生を含め、そのメンバーに、大きな自由を与える点にあります。大学における研究では、研究テーマの設定、遂行過程を各自が自由に選択でき、メンバー間の自由な討議によって、各自の独創性が充分に発揮できます。これに対して、大学以外の組織では、組織が選択した目標に従って各メンバーに指示が与えられるシステムになっており、各個人には目標選択の自由がありません。

自由であることは、束縛がないことを意味しますが、一方では、それを享受する人に厳しい自己制御を要求するものです。皆さんは、大学における研究生活で、自由な人間であることを、実感できるスタート点に立っているわけですが、それを可能にしてくれたご父兄や社会に対して感謝するとともに、今日からは、自分の選択した目標達成のために努力し、研究成果を社会に還元する責務があります。

皆さんが、それぞれの研究生活を始められるにあたり、いくつかの助言をお送りしたいと思います。

学部では、専門分野の基礎的な知識や能力の習得が主な課題ですが、大学院では、専門分野において、独立した研究者としての資質を身につけることが求められます。私は、様々な専門分野に共通して必要な研究者としての資質とは主に次の4つの能力ではないかと考えます。

第1は、「評価する力」です。自らや他の研究者が得た事実や発見が、専門分野の中でどのような意義を持つのかを正しく評価する力が求められます。そして、正しく評価するためには、自分の関わる分野や研究テーマに関して、現在までに確立された理論や法則はどのようなものであり、未解明の部分はどこにあるのかを正確に把握する必要があります。

第2は、「発想する力」です。多くの知識を持ち、論理的に考えることができさえすれば、良い研究ができるわけではありません。もしそうなら、膨大で正確な記憶を持ち、複雑な論理演算のできるコンピュータは、一流の研究者のはずです。良い研究には、どこかの時点で、必ず直感に基づく論理の飛躍や発想の転換が起こっています。これが人間とコンピュータの違いであり、優れた研究者とそうでないものの違いでもあります。

第3は、「持続する力」です。研究に費やされる努力の多く、或いは殆どが、失敗に終わります。それを乗り越えて良い研究に結実させるには、強い意志を持って研究を持続する能力が必要です。

第4は、「まとめ上げる力」です。研究の成果を発信するためには、研究論文を書く場合であれ、ものや作品を制作する場合であれ、実験結果や部品、アイデア、などを1つの「かたち」にまとめ上げる必要があります。この段階では、論理の飛躍や発想の転換を、精緻な体系へと組み込み、しっかりとした構造を作り上げる力が求められます。

これらの能力の多くは、生まれつきのものでもなく、一朝一夕に身につくものでもありません。研究生活を通じての、地道な、そして不断の努力によってのみ得られるものです。研究に王道はありません。研究は教えられるものではなく、自ら行うものです。このことを忘れずに、新たな研究生活のスターをきって頂きたいと思います。

研究者としての能力の他に、もう一つ身につけていただきたいのは、皆さんが取り組まれる研究が、社会や地球環境の中でどのような意味を持つのかを常に考える姿勢です。実際に皆さんが行う研究は、個別的・具体的テーマに絞ったものになるでしょう。しかし、その中にあっても、常により広い視野に立って、自らが取り組んでいる課題が、人間やその他の生物、あるいは無生物をも含む地球環境を守り発展させる上で、どのような意味を持ち、価値を持つのかを問い続けることが、大学で研究するものに求められる資質であり責任であります。

皆さんの大学院生活が実り多いものであることを期待し、お祝いの言葉と致します。

平成16年4月5日
京都工芸繊維大学長
江島義道